

第40回住総研シンポジウム概要 ※東日本大震災復興支援事業

テーマ「作られたものから作るものへ」ー主体形成としての住宅

第2回：家族は虚像？新しい集住の行方～個と家族，主体と世帯，IとWeの揺らぎ

2014年10月24日（金）13：30～17：00 建築会館（東京都港区）

司会： 木下 勇（千葉大学大学院 教授/住総研研究運営委員会 委員長）

講師： 山本 理奈（東京大学大学院総合文化研究科 学術研究員）

青木 純（（株）メゾン青樹・（株）都電家守舎 代表取締役）

岩佐 明彦（新潟大学工学部建設学科 准教授）

コメンテーター：宮前真理子（NPO法人コレクティブハウジング社 副代表理事）



木下勇氏



山本理奈氏



青木純氏

本年度の重点テーマ「作られたものから作るものへー主体形成としての住宅」では、わたしたちが社会の受動的な存在ではなく、自らの暮らしや生活を築く主体的な存在であるためには、今どのようなことができるのか、その方向性を探る。この住まいの主体性は、個のみならず、他人の主体性も視野に入れて考えていかなければならないとして、第二回目は「家族」をテーマに議論が進められた。わが国では、多世代世帯から核家族の時代を経て、少子高齢化・人口減少の深刻度は増し、高齢者の単身世帯増加など家族の変容は、めまぐるしい。「遠くの親戚よりも近くの他人」というように、実態は「家族」という概念そのものが解体しつつあり、これからは近隣関係を含めた関係性から見直していくことが不可欠である。

重点テーマ発案者であり司会の木下勇氏（千葉大学大学院）は、家族像や近隣関係が変われば住まいも変わるとして、ものが変われば人間関係が変わるのか、人間関係が変わればものが変わるのか、そのあたりを西田幾多郎の「作られたものから作るものへ」という言葉を引用して「住まいの主体性」考えていくと説明。冒頭では「家族・市民社会・国家」という三段階論にも触れ、現代日本における家族像のゆらぎ、また新しい地域社会のあり方、あるいはわが国の行方までを見据えて議論していくものとなった。

◆報告1「家族と住まいの変容『マイホーム神話の臨界』」

山本理奈（東京大学大学院）

住宅社会学の可能性を試みる山本氏は、高度成長期以降の日本社会の背景から、家

族と住まいの変容を読み解く。これからは「夫婦と子ども」で成り立つ家族は相対的に減り、単身世帯の増加が明らかであるのに関わらず、未だに「夫婦+子ども二人」を標準世帯とし、これを指標として政策のベースを考えていることを改めるべきだと指摘。また、こうした社会変化に伴う住まいの変容を、住宅の商品化の進展から分析した。それによると、近年特徴的なのは、住まい手の身体感覚に訴えるものの増加だということ。これは裏を返せば、住宅が家族を主題としなくなったということである。つまり、マイホーム神話の崩壊である。社会変化によって引き起こる家族の変容に基づいて、居住空間も再編されていく。そのときには、今まで語られた家族を主題にするのではないと、新たな家族像構築の必要性を説いた。

◆報告2「シェアハウスの次？」

青木純（（株）メゾン青樹・（株）都電家守舎）

2001年に家業の不動産を受け継いだ青木氏は、賃貸住宅という本来無個性であるものに個性を埋め込んでいく方法で、築古賃貸物件を一躍入居者待ち多数の超人気物件へと押し上げた。その方法とは、新規入居者に部屋の壁紙を選んでもらうという方法だった。これまで主体的な行動を受け入れる余地がないと思われていた賃貸住宅に対して、「あなただから、今だから、ここだから」という青木流理念で風穴を開けた。

次に試みたのは、東京都練馬区の新築賃貸集合住宅「青豆ハウス」（2014年3月竣工）。“育つ集合住宅”を掲げ、建築工程を毎日ブログで公開し、物語を紡いで共有していく。最終的に居住世帯を8世帯に絞

第40回住総研シンポジウム概要

り（その内の1世帯は青木自らが住む）、居住予定者はこの物語の主人公となっているのである。「住まいは人が主役、棲み人を主体として建物を捉えると楽しいものになる」と、青豆ハウスの住民主催のお祭りや行事など、地域や近隣との関わりを気負わず楽しんで暮らす様子が紹介された。

◆報告3「暫定の場の『IとWe』仮設住宅に作られた場所とその行方」

岩佐明彦（新潟大学）

岩佐氏によると、東日本大震災による仮設住宅建設は5万3千戸、震災4年目のいまなお4万1千戸の仮設住宅が残り、およそ8万9千人の方が居住を続けているという（2014年9月現在）。岩佐氏は、新潟県中越地震（2004年）のリサーチをベースに、仮設住宅を住みこなすためのノウハウ集「仮設のトリセツ」を作成して公開する。中には「仮設の達人」と称したオーバースペックともいえる腕自慢の事例もあり、住民に大変好評だという。こうした住みこなしは、仮設住宅の欠点を解決するだけでなく、入居者同士のコミュニケーションの促進、居住者の役割の発見（特に男性）など、様々な効果が挙げられる。ネガティブな情報が多い仮設住宅でも、そこに住むということを積極的に後押しする試みである。先の見えない暫定的な住居「仮設住宅」、しかしこの暫定の住まいが、その後の暮らしの軸となるような計画を住み手の主体性から引き出していけるのではないかと、本活動の展望を含めて語られた。

◆ディスカッション

コメンテーターの宮前真理子氏（コレクティブハウジング社）は、山本氏が講演で使った「臨界」という言葉に反応して、「核家族がメルトダウンすると感じた」と口火を切った。ようやく手に入れた夢のマイホームで、老後は夫婦二人、ゆくゆくは一人暮らし、ついには孤独死を迎えるケースを避けられないほど、核家族の構造は破綻寸前である。今私たちは、家族や住まいを考えるスタートラインに立つと述べた。

続けて宮前氏は各講師へ「これからの家族のかたちは？」と問うた。山本氏は「夫婦と子どもという家族像に左右されず、学校や職場、近隣など、その人が持っているネットワークとともに住まいを変えていくこと」、青木氏は自身の活動に高齢者があまり関わってなかったのではないかという指摘も絡めて、「まちぐるみで多世代のバランスがとれていることの方が重要。まちの中の一人であるという意識があるかどうかで、家族のあり方は変わってくる」と述べた。また岩佐氏は、仮設住宅という暫定的状況の下では「住まいは変わっても家族は守ろう」という家族への意識が強く感じられたというが、これからの家族像は、血縁から場所の縁のようなものが強くなっていくのではないかとそれぞれの「家族」のかたちが示された。

これを受けて宮前氏は「人間は老い、病にかかり、様々な悲しいことや嬉しいことがある。そういう中で、自分の主体性を主張するだけではなく、むしろ他者の主体性を受け止めること、他者の主体性を組み込むための努力、そのあり方がこれから求められる」と、家族の境界が曖昧になっている今こそ「IからWeの主体」が重要な視点になると強調した。

司会の木下氏は、これらの議論を総括して、主体的に家族以外の疑似家族を作りながら、周辺の地域を巻き込んでいく青木氏の試みについて「今はマイノリティでも、これからの日本社会が求めているもの」だとして再評価した。さらに、他者の存在は子どもの成長過程においても欠かせないことも加えて指摘。ヘーゲルの「子どもは他人にも両親にも物件として属するものではない」という言葉を引用して、「子どもを一個の自由な人格として認めることで、次なる市民社会の一員になり、そういう市民が福祉国家や安心した暮らしや社会をつくっていく」と、家族という枠に捕われず、“集まって住まうこと”を“主体的な暮らし”へとつなげる議論をさらに深めていきたいと締めた。



岩佐明彦氏



宮前真理子氏